

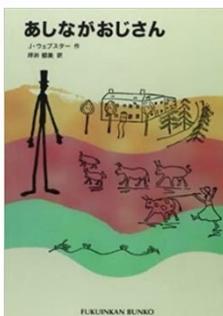


～洛西からの一読～



今回のテーマは「手紙」

昨今、通信手段が随分と様変わりしてきました。今やLINEの着信音があちこちで聞こえてきます。むかしむかし「手紙」というものがあつたそうと言われてしまいそうです。「手紙」をもらうことも、出すことも少なくなつてしまい懐かしく思つた方読んでみてください。



あしながおじさん (DADDY -LONG-LEGS)

J・ウェブスター 作・画 坪井郁美 訳 福音館書店

20世紀初頭のアメリカでのお話です。孤児院で育つたジェルーシャは、17歳になつて孤児院を出ていく歳になっていました。どうして身を立てていけばよいのか悩んでいるとき、孤児院の評議員の一人から支援を受けて大学への進学を提案されました。条件としてはその支援者へ手紙を書くことでした。どこの誰ともわからない人に手紙を書くのは難しいわと度々「あなたはどんな人ですか」と尋ねるのですが返事はありません。孤児院で育つた女の子が大学へ進学し、やがて小説家になるというサクセスストーリーです。今回注目したのは彼女の手紙の表現方法、年上の人に出す文面ですから、堅苦しく、尊敬の言葉を使つてと思ひながらも、時にはユーモアがあつたり、すねてみたり、質問攻めにしたりと自分の過ごした時間を「あしながおじさん」と共有している感じがあふれています。こんな手紙を受け取つたら、嬉しい？ 悲しい？ 楽しい？ と時々のお話が伝わってくるようです。



郵便屋さんの話 (チャパック童話 絵本シリーズ)

カレル・チャパック=作 関沢明子=訳 藤本 将=画
フェリシモ出版

郵便局がしまっている夜、そこで何が行われているのか知りたいと思いませんか？ 郵便局員のコルババさんは、つうたた寝をしてしまい、目が覚めた時はもうすっかり夜も更けていました。物音がするので、こっそりのぞいてみると、小人たちがせせせと郵便のお仕事をしていたのです。ある日、コルババさんは真っ白な封筒を見つけました。小人によるとそれはとても大切な大事な手紙のようです。コルババさんはどうしても届けたいと、国中を探し回ることになりました。てくてくてくてく歩くコルババさんと一緒に探し回ってみてください。